



(深谷)

群馬・世良田諏訪下遺跡

- 1 所在地 群馬県新田郡尾島町世良田
- 2 調査期間 一九九一年(平3)一〇月～一九九三年六月
- 3 発掘機関 尾島第二工業団地埋蔵文化財発掘調査団
- 4 調査担当者 三浦京子
- 5 遺跡の種類 集落・墓・生産跡
- 6 遺跡の年代 五世紀～一九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

世良田諏訪下遺跡は大間々扇状地末端の低台地上に位置し、北側に石田川が東南流する。現状は起伏のない平坦な地形であり、水田や牛蒡などの畑作が行なわれている。調査は第二工業団地造成に伴う発掘調査で、調査面積は用地面積二五万㎡の内、緑地化される六七〇〇㎡を除いた面積である。

この地域は仁安三年(一一六八)に新田義重より義季に譲られた新田庄の郷の

一部と想定され、周辺には中世新田氏一族関係、近世徳川氏関連の遺跡が多い。西方一・五kmに総持寺、西南方一kmに長楽寺や世良田東照宮、〇・五kmには船田館跡・今井城跡などが存在する。また、西方には歌舞伎遺跡・三ツ木遺跡などの古墳時代から平安時代の集落跡や小角田古墳群などが存在する。当遺跡も世良田四十八塚として知られ、明治・大正時代にはまだ墳丘を残すものが多くあったというが、その後の開発による削平のため、調査に入った時点で調査地域内に墳丘を残すものは一基のみであった。発掘調査の結果は、帆立貝式古墳四基、円墳六七基と、予想以上の古墳群が検出され、円筒・形象埴輪など多くの貴重な資料が得られた。この他、古墳時代後期の堅穴住居五棟、平安時代の館跡及び堅穴住居一四棟、平安時代初期の洪水により埋没した水田跡・畑・用水堀などを検出している。中世以降では溝と土坑が多く、大半の溝が浅く直交するもので畑や水田などの地境と思われる。

木簡を出土した溝は、調査地域の南寄りに位置し、南西から北東方向へ一八六m流れ、途中で北に大きく屈曲し石田川へと向かうが、末端は氾濫原の中に消え不明瞭となる。南西側は調査区域外へ抜け、方向としては世良田の中心地へ向かっている。溝幅は四～七m、深さ一・六～二・二mを測り、全長二五三mを調査した。木簡は緩かな流水により流されたような状態で、ほぼ底面から五〇cm以内の堆積土中から検出されている。総数四三九点で、形態は大半が上端部

を圭頭状にし、左右両側に切り込みを一段から三段入れるものもあり、下端部は削り尖らせている。他に木皿二点、板草履七点、曲物の底板や折敷等の破片も出土している。しかし、土器・陶器類等の出土は少なく、常滑三筋壺・大甕・鉢、在地産と思われる鉢など僅かな破片が出土しているのみである。溝の年代を推定すると常滑三筋壺の口縁部形態、甕では口縁部の縁帯が幅広く「ㄣ」形状を呈していることや鉢の形態などから、常滑編年Ⅲ期後半と考えられる。明らかに他の時期と考えられるものは埴輪以外には無いため、この溝はほぼ一四世紀前半の所産として大過ないであろう。

8 木簡の积文・内容

- (1) 「南无大日如来」 (245)×33×3 051
- (2) 「くき南无大日如来」 270×19×2 033
- (3) 「くき南无大日如来」 (238)×32×4 039
- (4) ・「くき南无阿弥陀×」
・「くき南无阿弥陀×」 (222)×37×3 039
- (5) 「くき南无阿弥陀仏」 278×20×3 033

「南无大日如来」が最も多く、明瞭なものだけで五四点、部分的に判読できるものを入れれば大半がこれに属する。この内最初に梵

字（「大日如来」の種子）を付けるものが三二点見られる。他に「南无阿弥陀仏」が四点、梵字のみが書いてあるもの二二点である。

（三浦京子）

